

イメージビデオに
出演したら
挿入がないだけで
ほぼA V
みたいな
撮影だった話

written by
ハメット

体験版



抜き
ベ

破滅乱淫オーガズム

■キャラクター

穂波 優那（ほなみ ゆうな）

小さいころからアイドルになるのを夢見てがんばってきた健気な少女。

引っ込み思案で押しが弱く、なかなかデビューの機会をつかめずにいた。

男の子とは手もつないだことがなく、当然処女。

オナニーはよくしていて、最近是指を入れるのがお気に入り。



「ほんとに発売……
しちやっただ……」





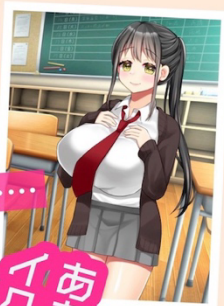
無垢な爆乳に
色づくつぼみ

自分の指で開いた花園から
したたる蜜……

18歳処女、
はじめての
快感に
濡れ乱れる。



4人がかりの
絶頂マッサージ♡



ああ、イクイク……
イクイク……
イクイク……
イクイク……

「ひどいよ……
こんなつもりじゃ
なかったのに……」



R-18



YHXTC-018
¥4,400 (税抜4,000)
JAPAN SALES ONLY

発売：破滅乱淫オーガズム
販売：アクメヴィジュアル

プロローグ

受け取った宅配便の荷物を手に、優那ゆうなは早足で階段を駆けのぼって自室へと飛び込んだ。家にはひとりきりだけれど、いちおう後ろ手にカギをかけて、ぺたんとカーペットに座り込む。

勢いよく階段を上がったせいばかりではない胸の鼓動を感じながら、優那は封筒をびりびりに破いて中身を取り出した。

入っていたのは新品のブルーレイソフトが一枚。パッケージを包む真新し

いシュリンクにはセロテープでメモが貼られていて、

《今日発売になります。ご自分でもご覧になってみてください。いい出来で

す。れいぜい
冷泉》

と、マネージャーの几帳面な文字で記されていた。

「ほんとに発売……しちやっただ……」

くしゃりとメモを握りつぶし、テープに引っぱられて開いた裂け目からシュリンクを引きはがした。

「こんなのが、みんなに見られちゃうんだ……」

パッケージには白昼のビーチで白いマイクロビキニを着てほほえむ優那が

大写しにされている。薄い水着にはくっきり乳首まで浮き出していて、小さい布からはわずかに乳輪の色までもがはみ出して見えていた。

「こんな、のが……」

涙で視界がにじむ。

ソフトのタイトルは『処女^{オトメ}の性域』となっていて、

《このドスケベボーディーで正真正銘未経験！》

《はじめてなのにぐちょ濡れ連続絶頂の超逸材♡》

《18歳になりたてのイキすぎデビュー作!!!》

などと、あまりにもあんなまりなキャッチコピーが並んでいる。

とてもアイドルのDVDとは思えない。これじゃまるっきりAVみたいだった。

「ひどいよ……こんなつもりじゃなかったのに……」

ようやくたどり着いた、けれどもこれからがほんとうの試練になるという、そのはじまり。大事な大事なスタートライン。一生にいちどきりのデビュー。それをまさか、こんなかたちで迎えることになるなどとは、考えてもみなかった。

小さいころからずっとアイドルになることを夢見て、勉強とアルバイト以外の時間はみんなレッスンに費やしてきた。友だちとのつきあいも学校や職

場のみ、もとよりアイドル志望だから彼氏なんてもってのほかで、男の子とは手をつないだことさえなく、まだ見ぬファンみんなの恋人になることだけを胸に、日々懸命に励んできたのだ。

押しの弱さと引込み思案な性格のせいで受からなかったオーディションは数知れず、ちよつとした仕事を得られたと思っても名前の出ないエキストラやら、折り込みチラシのモデルくらいがせいぜいで、まともにデビューと呼べるような場所にはまったく近づけないまま、成人年齢の十八歳が目前に迫り、さすがに潮時かと弱気になっていたとき――。

これまでずっと親身になって面倒を見てくれていた温井マナージャーが、ぬくい

事務所の判断で優那の担当からはずされてしまい、いまの冷泉マネージャーに変わったのだった。

やさしい温井マネージャーと違い、ビジネスライクで愛想もない冷泉マネージャーが担当になってから数日を過ごただけで、優那はもう、ほとんど辞める決心を固めかけていた。いつまでも芽が出ない自分ががんばってこられたのは、ともに笑い、ともに泣きながら隣でいっしょに走ってくれる温井マネージャーがいたからだっただと、いまさらながら痛感させられたのだ。温井マネージャーのためにもがんばろうと、ふがいない自分を鼓舞できていたのだ。

あきらめるのは悔しいけれど、悲しいけれど、ちょうどいい機会だと思った。

ところが、優那が辞意を伝えようとしたその日、冷泉マネージャーから突然デビューの決定を知らされたのだった。

まさに降って湧いたような話だった。

オーディションもなにも受けていないのに、冷泉マネージャーが営業して取ってきた仕事だという。

冷泉マネージャーが担当になったのは自分を辞めさせるためもあったんじゃないかと思っていた優那は、この感情の読めない新たなパートナーが自分

のために懸命になってくれていたことをそのときはじめて知り、勝手に辞めようと考えていたことを心の底から恥じたのだった。

待ち望んだデビューとなるはずだった、イメージDVDの仕事。

大喜びして、やる気満々で、元気に現場へと向かった優那を待っていたのは、しかし想像とはかけ離れた、アイドルのするようなこととは到底思えない、あんな、あんな――。

（デビューはデビューかもしれないけど……これじゃ温井さんにも胸なんて張れないよ……）

優那の担当としての最後の日、何度も何度も謝ってから、これからずっと

と応援しているからと泣きながら言ってくれた温井マネージャーのやさしい顔がまぶたに浮かぶ。

ほとんど裸みたいな姿でパッケージに映った自分をしばらく見つめたまま、優那は少し涙をこぼした。

ふうつと息をつき、手の甲で目元をこしこし擦る。

（だめだめ、思ってたのと違ってたって、やっとデビューできたんだもん。これからはもつとがんばって——）

なんとか気を取り直し、手にしていたデビュー作のケースを裏返して、優那は目を見開いた。

「やだっ、なにこれっ……」

裏面にはいくつものキャプチャー画像が、表面のものよりもさらに扇情的なキャッチコピーの数々とともに散りばめられていて、写真などはほとんど肌色で埋め尽くされていた。

「うそ、うそ……こんなところまで……まずいところはカットするって言ってたのに、なんで……」

あられもない自分の姿を目にして、撮影当日の記憶が急速によみがえってくる。

初対面の男性たちに囲まれて、誰にも見せたことのないような部分までさ

らけ出し、そればかりかさんざん全身をいじりまわされて、あろうことか数えきれないくらい何度も何度も絶頂に達してしまった、恥ずかしすぎる数時間間の出来事。

恥ずかしくてたまらないのに、それさえも吞み込んでしまうような気持ちよさに裸身をくねらせ、甘い嬌声をまき散らし、いやらしい汁をそこらじゅうにしぶかせてしまったあの日の記憶――。

ごくろ、と優那は喉を鳴らす。

（あのときのこと、このなかに入ってるんだ……）

震える指先でケースを開き、取り出したディスクをプレーヤーにセットす

る。

（こわいけど、たしかめなくっちゃ……どこまでみんなに見られちゃうのか、確認しておかなくっちゃ……）

デビュー作となるブルーレイソフトの発売日が決まっすぐに、優那はいつも応援してくれている学校の友だちやアルバイト先のひとたちに、すかさずそれを報告した。誰もが喜んでくれて、ぜったい発売日に買うからと、そう言ってくれた。

（だからみんなに見られちゃう……）

まさかあんな内容になるとわかっていたら、誰にも教えなかったのに。

撮影が終わってすぐ、あわててみんなにソフトを買わないようにと伝えたけれど、無駄だった。

恥ずかしいからやっぱ見ないでほしい、なんて言ったところで、照れ隠しくらいにしか思われるはずもない。

かといって、見られたくない理由を伝える勇氣はなかったし、そもそもあの日のことをうまく説明できるようなことばたちを、優那は持ち合わせていなかった。

手にしたパッケージに目を落とす。

《無垢な爆乳に色づくつぼみ——》

《自分の指で開いた花園からしたたる蜜……》

《18歳処女、はじめての快感に濡れ乱れる。》

《4人がかりの絶頂マッサージ♡》

《ああっイクッ！ イクイクまたイグううつ♡》

こんな文章を目にしたら、みんな見るのをやめてくれるだろうか。

それとも優那と同じように、見てたしかめようとするのだろうか。

見てしまったひとたちは、いったいどう思うのだろうか。

これを見た友人知人の感想を想像して、それを実際に聞く覚悟を決めておくためにも、まずは自分でしっかり見ておく必要がある。

（こういうのって、きっと売れるようになってパッケージだけ大げさにしてあるんだよね？　だってあんなのそのまま収録したら、ほとんどアダルトビデオと変わらなくなっちゃうもん。だから大丈夫……大丈夫なはず……）

祈るような思いで、優那は再生をスタートさせた。

チャプター1

制服姿の優那が画面の奥にあらわれて、だんだんこちらへ近づいてくる。

草木に囲まれた未舗装の小道をゆっくり歩き、恥ずかしげにほほえみながらカメラのまえまでやってくると、優那は鞆を両手で提げたままその場でくるくる回ってみせ、小首をかしげてはにかんだ笑顔を浮かべた。

それが自分自身だということを差し引いたとしても、あまりの素人っぽさに見ているほうが恥ずかしくなってくるような、そんなたどたどしいほほえ

みだった。

（カメラのまえでただ歩くだけ、ただ笑うだけがあんなに難しいことだなんて、あのときまではぜんぜん思いもしなかったな……それがふつうに、自然にできちゃうんだから、やっぱりプロのアイドルってすごいんだよね）

顔をアップにしてみたり、胸元を大きく映してみたり、ミニスカートから伸びる脚を舐め下ろすようにしてみたりして、たっぷりと優那の全身を収めてから、やがて画面は室内へと切り替わる。

学校の教室そっくりにつくられたセットのなかで、優那はひとりでちゃんと椅子に座り、机に向かっている。

カメラが近づいていくと、おもむろに優那は立ち上がり、レースカーテンのかかった窓の近くまで歩を進めていった。カメラもそのあとを追いかける。恥ずかしそうに目をうるませた優那の顔がアップで映し出され、ゆっくりとそのまま胸元へと下がっていく。

むかしからのコンプレックスでもあり、顔立ちとあまりにちぐはぐだからという理由で数々のオーディションで落とされた原因でもある大きな胸。

白いブラウスをぱんぱんに突っ張らせている豊かすぎるふくらみを、優那の手が下から持ち上げるようにして小さく揺さぶる。

（やだ、こんなふうに撮られてたんだ……）

現場では意味もわからず指示されるままにしていたが、こうして見ると小さな手との対比でそのサイズがいつそう強調され、にぶい弾み方からはその重さまでもが画面越しに伝わってくるようだった。

たつぷりと胸の大きさを印象づけたあとで、優那の手はブラウスのボタンをゆつくりとはずしていく。

むっちりと白い肉の寄り合う谷間があらわになり、胸のかたちを整えるという下着の役割などまったく果たしてくれないような、面積のごく小さなブラジャーがさらけ出される。

乳輪こそ隠れているものの、それ以外はほぼすべてがむきだしで、乳房の

形状が完全にあらわになってしまっている。

肌の質感までわかるほどのアップで胸をしつこく映したあと、カメラは続いて下半身へと向かう。

優那の指先がホックをはずし、ジッパーを下ろすと、スカートが一瞬で足元へと落ち、淡い水色のショーツが大写しになった。

ゆっくりボタンをはずして焦らすようにあらわにしていた胸とは違い、こちらはあまりにもあっけなくカメラのまえにさらけ出されてしまった。

ブラジャー同様に面積の小さなショーツは、やはり最低限のエリアしか隠してくれていない。おまけに肌には密着せず浮き気味になっているせいで、

真正面以外のアングルになるたび、恥丘のあやういところまでちらちらと見えてしまっていた。

（あつ、あつ、見えちゃう見えちゃうつ、そんなアップにしたらあそこまで映っちゃうから……！）

毛穴が見て取れるくらいのズームで布の脇から恥丘をとらえたところで、ぱつとカットが切り替わる。

（いまのところ、切り替えが不自然だった……きっとDVDには入ってないだけで、ぱつちり撮影はされちゃってたんだ、わたしのあそこ……）

でも、撮影時のことを思い返せば、そんなのはなんでもないようなものだ

った。

画面のなかではふたたび優那の胸元が大写しにされていて、重量感のある乳房とは不釣り合いな細い腕が、そこへすうっとあらわれる。

優那は自分を抱きしめるような格好で胸へ横一文字に左腕をわたすと、右手を背にまわし、ブラジャーのホックをはずした。そのままずりりと左腕の下から下着を抜き去ると、だぶんと重たく両胸が沈み、優那はあわてた素振りですぐ右腕も使って大きな乳房を隠しにかかる。

頬を真っ赤に染めて目をうるませ、しばらくカメラを見つめたまま動かずにいた優那だったが、しばらくすると猫背気味になっていた身体をまっすぐ

に伸ばし、せわしく目を泳がせながら両腕を胸から退けていった。

うまく頂点を隠しながら腕を引いていくと、やがて両手のひらで左右の乳輪が隠れている以外、迫力のある大きな乳房がまるつきりさらけ出されてしまった。

緊張で手が震えているせいで、やわらかな胸の肉までぷるぷると小さく揺れて、その触感を画面越しに伝えてくる。見ている優那の頬もすっかり熱くなっていた。

無防備な乳房をさまざまな角度からじっくりととらえ、やがてアングルが正面に戻ったところで、優那はさらに両手を胸から退けていく。見るからに

慎重な手つきで、やがて左右それぞれ三本の指だけで乳首を隠す格好になった。

数秒後、ちらっと目線を上げた優那の顔がわずかにこわばるのが見て取れた。視聴者が見ても気づかないような変化だったが、理由を知る本人ならすぐわかる。

（えっ、この先も入っちゃってる、ってこと……？）

DVDでは静かなBGMが流れているだけで現場の音声は収録されていないけれど、優那はこのときのことをはっきり憶えていた。

『指、二本に減らしてみようか』

監督が、そう指示を飛ばしてきたのだ。

言われるままにあの日そうしたとおり、画面のなかの優那も左右の薬指をゆっくり折り曲げ、乳首を隠す指が人差し指と中指だけになる。

「あっ、だめっ、見えてるっ……!」

ほかのひとよりも大きな乳輪は、優那の細い指二本だけでは隠しきれなかった。薄桃色の、周囲とはあきらかに色素の異なる部分が、指の上下からはみ出してしまっている。

「だめだめだめだめっ……」

しかし、まだこれで終わりではない。この続きを優那は知っている。

『うーん、やっぱり一本だけにしよう。中指だけでいいっか』

そして優那は素直に従い、左右の人差し指を引っ込める。

「ああああ……」

中指を必死に押しつけてどうにか隠している乳首を残して、ついに乳輪のほとんどがあらわになってしまった。

「カットするって言ったのに……ちゃんと消すって言ったのに……」

——きょうは一発撮りでいくから、もしうっかり見えちゃいけないところが見えちゃっても、そのまま撮影は続けるけど、まずいところは編集段階でぜんぶカットするし、優那ちゃんは気にしないで最後まで言われたとおりに

やってくれば大丈夫だから――。

「これって、見えちゃいけないところじゃないの……？」

こみ上げてきた涙を指先で拭って、じっと画面に目を凝らす。

乳輪の細かな凹凸がわかるほどカメラが寄って、優那自身でも見たことがないくらいにじつくりと、事細かに恥ずかしい部位を見せつけられる。

しつこく乳房の頂点ばかりが映し出されつづけるなか、優那が指の位置を少しだけ調整した拍子に、ほんの一瞬、必死に隠していた乳首がちらりと、しかしはつきりと大写しになった。

「やだっ……！」

ぐりぐり指先で押し込んでいたせいですっかり硬くとがっていた乳首が、恥ずかしく勃起してしまっていた大きめの乳首が、それからもちらちらと、指の端から顔を出し、カメラはその都度、見逃すことなくすべてをしつかりと映像に収めていった。

「ひどい……みんなに見られちゃうのに、こんな……」

ぼろぼろ涙をこぼすいまの優那をよそに、画面のなかの優那は続いて下腹部へと自身の手を伸ばしていく。

カメラは乳房から離れ、今度は優那のショーツを大写しにしている。そこへ伸びてきた右手の指先が布地を左右からきゅつと絞り、ぐいぐいと引っぱ

り上げはじめた。

「だめ……だめ……」

亀裂に布地がきつく食い込み、左右からはぼってりした大陰唇がこぼれ出している。マネージャーに言われて前夜に処理しておいた陰毛の剃り跡まで確認できるほどまでアップにされて、誰にも見せたことのない秘部をねつとりとカメラで舐めまわされる。

はみ出した性器の外周を優那の指先がゆっくりと上下に撫でたり、ぷにぷにの肉をつまんでみたりしてみせる。

割れ目に布を挟み込ませたまま優那の右手が秘部を離れると、そこで窓辺

から少し移動する。

窓際近くにふたつ並べた机の上に優那は上半身を寝そべらせ、ぶらりと脚を垂らした姿勢であおむけになった。

両足で机を挟み込むようなかたちでガニ股になると、また股間がアップにされて、優那はふたたび右手でぐいぐいとショーツを割れ目に食い込ませていく。大股を開いているせいで、さっきよりもいっそう際どい部分までがよく見えてしまっていた。

そうするうち、今度は左手も画面にあらわれて、同時にそこでBGMが途絶えた。

『はあっ……はあっ……はあっ……』

優那の震える吐息が、テレビのスピーカーから聞こえてくる。

「やだ、これ……」

どうやらここからは音楽なしで、あのときの現場の音声そのまま使われているらしい。

『ふうう……ふううう……』

息とともに震える指先で、優那は食い込んだショーツを亀裂から引っ張り出した。よれた布地を左右の指先で広げて伸ばし、きちんと最初の状態に戻したまではよかったが、すべてが元通りというわけにはいかなかった。

薄い布が性器を覆った瞬間、じゅわっと中心に濡れたしみが広がったのだ。

「だめっ！」

思わず映像を一時停止させたが、ただ決定的な瞬間が画面にこびりついただけのことだった。

「ううう……」

うめきをもらして一時停止を解き、もうこれ以上は許してと祈りながら、固唾を吞んで映像を見つめる。

ショーツにはみるみるしみが広がって、それが性器からあふれ出した性的高まりの証拠であることは、もはや誰の目にもあきらかだった。

『んう……ふううっ……』

悩ましく吐息を乱して、画面の優那は下着の左右から指先を差し入れる。
当日の記憶がよみがえり、優那は目を見開いて硬直した。

『あう……』

ショーツの中央近くまでもぐり込んだ中指と人差し指が、ゆっくりと左右
それぞれへ引き出されていくに従って、濡れた布がうつすらと色をつけてい
く。

両手の指で押し広げられた割れ目の内側にショーツが貼りつき、奥の色を
かすかに透かしてしまっているのだ。

「あ……あ……あ……」

ぐいぐいと指先が布の下で性器を押し広げ、くちっ、くちっ、と小さな濡れ音までこぼれている。

下着で覆われているとはいえ、開ききった陰部は薄布を通して形状さえもはっきりと把握できてしまうレベルで大写しにされていた。

『ふうっ……はああっ……』

ぴくん、ぴくん、と小さく腰が浮き上がり、それに合わせるように布の下で膣口がかすかに蠢くようすまでが手に取るようにわかってしまう。めいっばいに広がっているせいで皮からむきだしになった大きめのクリトリスさえも

が、濡れた下着をぽっちりと丸く押し上げているのが見える。

（こんなのもう……あそこ見せてるのと変わらない……）

呆然と画面を眺めながら、優那の意識は記憶のなかへともぐっていく。

続きは製品版でお楽しみください。

■サークル「破滅乱淫オーガズム」作品一覧

既刊

- 【1】委員長・静井莉子の露出自慰日記（優等生のカゲキないキぬき）
- 【2】ロリのふりして脱法露出！合法ロリでも外で脱いだら違法です!!
- 【3】露出体験告白 イキすぎた公開絶頂
- 【4】着衣女性×露出男性 勃起見せつけ体験集
- 【5】時間停止能力を手に入れて露出オナニーを満喫してたら人生終了しちゃった話
- 【6】全裸になりたいわたしたち 露出体験告白2
- 【7】身動きできない満員電車でロリたちに勃起を勝手に出されて射精させられた話
- 【8】イメージビデオに出演したら挿入がないだけでほぼAVみたいな撮影だった話

近刊

- ・ 着衣女性×射精男性 勃起見せつけ体験集2
- ・ 露出体験告白3（仮）
- ・ 娘がアダルトライブチャットをしていたのでエロいリクエストをしまくった話

（近刊の発売順は変更になる場合があります）

＊各電子書籍ストア、ダウンロード販売サイトにて発売中！

（ストア、サイトによっては規約の関係上、一部扱いのない作品があります）

公式サイト

<https://roshutsu-portal.com/circle/>

2024年5月現在